

シェイクスピアとジェンダー：驚異研究の概観

浜 名 恵 美

本論は、近代初期イングランドの文化とシェイクスピアのテキストに見出されるジェンダーを理解するために新しい視点を提起して、この問題を考察する論文の理論部の一部である。¹ ここでの主要目的は、「シェイクスピアとジェンダー：クレオパトラとジェンダーの驚き」（『筑波英学展望』、第21号〔2002年3月〕：43-62）の注3で予告したように、ジェンダー研究(gender studies)と驚異研究(wonder studies)を接合し、ジェンダーは驚きとして作用するという仮説を提唱するために必要な手続きとして、驚異研究を概観することである。

1. 驚異なるものの時代

近代初期のイングランドとヨーロッパの文学・文化研究の分野では、今日、驚異研究——より正確には、「驚異なるもの(the marvelous)」と「驚き(wonder)」の研究——と命名することができるほど、驚異に関する研究が発展している。ここでは、主要な先行研究に基づいて、驚異の定義と判断基準、対象、源泉、意義を概観し、必要に応じて批判的考察を加える。

「驚異」を意味する基本的な語は、英語では "marvel" と "wonder"、イタリア語では "meraviglia"、フランス語では "merveille"、ドイツ語では "Wunder" である。『オックスフォード英語辞典』で二つの語の代表的な定義を見ておく（使用例は省略する）。"marvel" は、ラテン語の "miror"（「驚く」「驚嘆する」「崇拝する」などを意味する動詞）から派生した "mirabilia"（「驚異」「異常」「不思議」「特異」「奇妙」などを意味する名詞）を語源とし、中世に英単語になったと推定される。イタリア語の "meraviglia"（古いつづりでは "malaviglia"）とフランス語の "merveille" も、語源は同様である。以下の定義で現在では「廃語」また

¹ 以下の拙論参照。「シェイクスピアとジェンダー：序説」、『言語文化論集』、第57号（2001年9月）：31-45。「The Wonder of Gender: A Note on *As You Like It*」、『言語文化論集』、第58号（2002年1月）：109-18。「シェイクスピアとジェンダー：クレオパトラとジェンダーの驚き」、『筑波英学展望』、第21号（2002年3月）：43-62。

は「古語」となっている意味でも、近代初期ではそうでない場合も少なくない。

marvel

† 1. = miracle 1. *Obs.* (「奇跡」、廃語。)

2. A wonderful or astonishing thing; a cause of surprise, admiration or wonder; a wonder. (「驚異なる、または仰天すべき事物。驚愕、賞賛、驚きの原因。驚異。」)

† b. A subject for surprise. *Obs.* (「驚愕の対象」、廃語。)

c. Wonderfulness. (「驚異であること」。)

d. A wonderful example (*of some quality*). (「(何らかの性質の) 驚異なる例」。)

† 3. A wonderful story or legend. *Obs.* (「驚異なる話や伝説」、廃語。)

4. Astonishment, surprise, admiration or wonder. *Obs. or arch.* (「仰天、驚愕、賞賛、または驚き」、廃語または古語。)

ラテン語を語源とする"marvel"とは対照的に、"wonder"は、ドイツ語の"*Wunder*"と同様にゲルマン語から派生したことは明らかなが、語源は不明である。

wonder

Something that causes astonishment. (「仰天させるもの」。)

1. a. A marvellous object; a marvel, prodigy. (「驚異なる事物、驚異、不思議」。

補注: "prodigy"は、現在では「天才」、特に「神童」「驚くべきこと、奇跡」「怪物」、古くは「異常な兆し」などを意味する。しかし、この箇所での意味は、用例から判断して「驚異」または「不思議」である。)

b. Marvellous character or quality; wonderfulness; marvels collectively. (Cf. marvel n.¹ 2 c.) (「驚異なる特徴または性質、驚異であること、集合的用法として諸驚異、"marvel"の名詞1の定義2 c 参照」。)

c. The object of astonishment (usually implying profound admiration) for a particular country, people, age, or the like. (「特定の国、人々、時代または同種のものへの(通常は深い賞賛を暗示する)驚愕の対象」。)

d. A marvellous specimen or example (*of something*). (「(何かの) 驚異なるものの標本または例」。)

2. a. A deed performed or an event brought about by miraculous or supernatural power; a miracle. ... *arch.* (「奇跡的または超自然的力によって実行された行為か、そうした力によって起こされた出来事、奇跡」、古語。)

† b. An extraordinary natural occurrence, esp. when regarded as supernatural or taken as an omen or portent. Chiefly *pl. Obs.* (「異常な自然の出来事、特に超自然的と見なされるか、前兆か兆候と思われる出来事。主に複数形で使用される。」
 廃語。補注: "omen" も "portent" も「不吉な前触れ」の意味で使われることが多い。)

3. A marvellous act or achievement. (「驚異なる行為または功績」。)

4. a. gen. An astonishing occurrence, event, or fact; a surprising incident; a wonderful thing. (「一般的用法。仰天すべき出来事、事件、または事実、驚愕すべき出来事、驚異なる事物」。)

† b. app. = miracle. *Obs.* (「使用例から明らかに、奇跡」、廃語。)

† 5. a. Evil or shameful action; evil; *pl. evil or horrible deeds. Obs.* (「悪行または恥すべき行為、悪、複数形の用例では悪または恐るべき行為」、廃語。)²

"marvel" および "wonder" の定義を見比べると、すぐ気づくのは、"marvel" の定義では "wonder" とその形容詞、"wonder" の定義では "marvel" とその形容詞が使われていることである。つまり、二つの語はしばしば相互交換可能なのである。ただし、"marvel" よりも "wonder" の方が、驚きという知覚的反応に関連して使用されることが多い。したがって、以下の考察では、可能な限り "marvel" は「驚異」、"wonder" は「驚き」と訳し分けることにする。さらに注目すべきことがある。二つの語には、見る者に、賞賛または崇敬の念を起こさせるような非常に肯定的な意味から、怪物、吉凶、(現在では廃語とはいえ)「悪」という比較的の不気味な意味や否定的な意味までがあり、これらを両極として、多数の興味深い意味を持っていることである。

"marvel" と "wonder" の二つの語は、上で見たように、辞書では多数の意味があると同時に、必ずしもいつも明確ではないとしても差異があるのだが、一般に、対象が「普通のものでない」場合はほとんど何にでも適用される。特に対象が「驚愕」や「賞賛」の感情を起こす力がある場合に使われる。ヨーロッパの16世紀半ばから17世紀末までは「驚異なるものの時代 (the age of the marvelous)」と呼ばれるほど、人々は驚異なるものに魅せられた。この時代の「驚異なるものの流行」は、文学、美術、音楽、演劇、宗教、自然科学、哲学等の広範な領域に及んだ。このことを理解するためには、1991年にアメリカ

² *The Oxford English Dictionary* (2nd ed. CD-ROM; Oxford: Oxford UP, 1994).

のダートマス大学（ニュー・ハンプシャー州ハノーヴァーにある大学、アイヴィー・リーグのひとつ）付属フッド美術館（Hood Museum of Art）で開催された「驚異なるものの時代」展覧会の見事なカタログを含む論文集をまず見るべきである。編者のジョイ・ケンセス（Joy Kenseth）によれば、これは「ルネサンスとバロック時代のヨーロッパ文化を理解するために、驚異なるものの主題を中心なものとして取り上げた最初の展覧会」³であった。

驚異なるものへの関心が台頭した事情としては、第一に、中世以来の奇跡や奇想天外なものへの信仰が残っていたことである。第二に、16世紀からの新しい動向がある。ルネサンスによって、古典テキストの再発見や翻訳を通して、ギリシア・ラテンの知的態度が復興したのである。驚異なるものに関する批評のおよび理論的言説については、後で検討することにして、ここではアリストテレスの再評価についてのみ触れておく。『形而上学』は中世でも知られていた。しかし、『詩学』の場合、15世紀にギリシア語手稿本が（再）発見され、ヴェネツィアのアルディーネ出版局（Aldine Press）によって1508年に出版されてから、ルネサンス文学理論に大きい影響を及ぼすようになった。アリストテレスは、驚異なるものと驚きが詩や悲劇に好ましい効果をもたらすことを強調したのである。⁴ 近代初期ヨーロッパ文芸理論の驚異研究の基本文献は、バックスター・ハサウェイ（Baxter Hathaway）著の『驚異と常識：ルネサンス文学批評（*Marvels and Commonplaces: Renaissance Literary Criticism*）』（New York: Random House, 1968）である。この中で、ハサウェイは、ルネサンスにアリストテレスの『詩学』における驚異なるものへの関心が格別強調された結果、多数の類似した語が批評家や文学者によって用いられていることに関して、次のように述べている。

... Aristotile did, as any close reader of the *Poetics* knows, put considerable emphasis upon the need for the marvelous in poetry, upon the need for the unusual, the improbable, and the transcendent. As we pursue the history of this particular emphasis of Aristotle's through the Renaissance, it is necessary to link together a group of words that are particularly

³ Joy Kenseth, ed., *The Age of the Marvelous* (Hanover, NH: Hood Museum of Art, Dartmouth College, 1991) introduction 10.

⁴ Kenseth 28.

interchangeable: "wonder" or "miracle" (*thauma*), "adimiration" (*admiratio*), "astonishment," "marvel" (*meraviglia*), "awe," "stupor," the unusual, the perfect, the sublime. Some of these terms are partly distinguishable because they divide into causes or effects. At its lowest level, the marvelous is merely that which holds our attention or interests us. Pontano in his *Actius* made admiration mean "applause." At its highest level, it is practically an access to Godhead or a direct intimation of divinity.⁵ (注: Giovanni Pontano [1426-1503] は、ナポリの詩人・人文主義者である。)

アリストテレス（主義）の伝統がどれほど支配的であったのかについては、議論の余地がある。とはいえ、文学者たちは、驚異なるものと驚きの理想を考慮して、古い主題であれ身近な主題であれ、新しい方法で表現し、主題に新しい洞察を与えるように奨励されたと言える。

近代初期は、未知の世界の発見と探検の時代でもあった。ヴェネツィアの旅行家マルコ・ポーロ (Marco Polo) の『東方見聞録』(13世紀末から14世紀初頭頃)、フランス人なのかイングランド人なのか正体不明の旅行家サー・ジョン・マンデヴィル (Sir John Mandeville) の有名な旅行記 (1366年頃) がすでに出版されていた。近代初期には、ついに新世界が「発見」された。旧世界となったヨーロッパの人々にとって、南北アメリカ大陸への探検は、驚異なるものへの関心をかきたてる重大な要因となった。16世紀後半からの東洋、中東、アフリカへの探検もこのような関心を強化した。

驚異なるものの時代の縮図と言えるのが、多種多様な好奇の対象になりえるものを収集した「驚きの部屋(wonder cabinet, *Wunderkammer*)」である。⁶ 近代初期のヨーロッパの少なからぬ人々は、ひたすら収集した。彼らは手に入れられるあらゆるものを収集し、宇宙の模型を形成しようとしたのだ。彼らは、多様性、豊富さ、珍奇なもの、異様なものへの偏愛とも言える態度を示した。異常な欲望に駆られた収集家たちは、百科全書の博物館を作り、全体的な知を探求しようとした。シェイクスピアの同時代人、富裕な実務家ウォルター・コー

⁵ Baxter Hathaway, *Marvels and Commonplaces: Renaissance Literary Criticism* (New York: Random House, 1968) 57-58.

⁶ Joy Kenseth, "A World of Wonders in One Closet Shut," in *The Age of the Marvelous*, ed. Kenseth 81-101 参照。

ブ (Sir Walter Cope) が、ロンドンの屋敷に驚きの部屋を所有していた。1602年にコープのコレクションを見物したドイツの貴族が、その様子を書きとめている。イングランドの最初期の貴重なキャビネットなので、これは引用に値する。

アメリカで女王がつけていた幾つかの冠、多数の楯と剣。全てが銅で作られた短剣には、全て黒い樹脂もしくはスペイン製の蠟でできた鞘がついていた。さらに、セイウチの歯二本、犀の角（長くはないが、上向きに曲がっている）、それに非常に粗い毛のついた尾。多数の異国の虫、鳥、魚、サラマンダー・スコロペンドラ、夜燐光を発するインドの小鳥。有名な小魚のレモラム、これにはスズキのようにほぼ四角いうること、ゲンゲのごとき頭がついていた。さらに、イルカの尾とミイラ。さらにまた多数のインディオの写本と書籍、ペルーの王がイングランド人に授けた木片に綺麗に書かれた旅券、種々の異国のキュウリも見た。古代においては名高く、シンバルと呼ばれる楽器は、真鍮もしくは鋼の球のように円形をしていた。打ちあわせると、トライアングルのような音を出したが、かつてそれが如何に用いられたのかは知られていない。⁷

驚きの部屋とは、要するに、ひとつの世界劇場であった。そこでは、世界のミニチュア、自然の驚きと人間の驚き(wonders)を見ることができたのである。

驚異なるものには枚挙にいとまがない。近代初期には、望遠鏡と顕微鏡の発明もあった。光学上の発明は、イリュージョンとして大衆の娯楽にもなったし、演劇の上演にも影響を与えた。自然は、例えば、洪水、地震、彗星、異常出産

⁷ Richard Altick, *The Shows of London* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1978) 9. 邦訳, R. D. オールティック著、小池滋監訳『ロンドンの見世物 I』(東京: 国書刊行会, 1989) 32-33. ウォルター・コープは、エリザベス女王の治世から古物協会の会員、ジェームズ一世の治世で財務大臣等の要職を務めた人物。彼のワンダー・キャビネットは、ただの道楽ではなかった。17世紀初期イングランドでは、一方で博物学者、探検家、ワンダー・ブックの著者たちが科学的正確さをますます探求するようになったが、他方で科学者たちは、自然界を詳細に記述する過程で驚異なるものを絶えず呼び起こした。コープのワンダー・キャビネットは、こうした驚異なるものへの相克する態度の相互作用を示すものと言える。Peter G. Platt, *Reason Diminished: Shakespeare and the Marvelous* (Lincoln: U of Nebraska P, 1997) 64-65 参照。"wonder cabinets"については、ステイヴン・マレイニーの論者も参照のこと。Steven Mullaney, *The Place of the Stage: License, Play, and Power in Renaissance England* (Chicago: U of Chicago P, 1988) ch.3 The Rehearsal of Cultures 60-87.

で、人々を驚かせてやまなかった。イングランドを含めたプロテスタンティズムが支配的な諸国では、キリスト教の奇跡を否定したが、これに対抗してカトリックの反革命では、聖人や秘蹟のイコンを流布させた。シェイクスピアも恩恵を受けた印刷術の発明と発展もあった。今日の視点から判断すれば不正確な図とはいえ、中世のものとは比較にならないほど詳細な世界地図——しかも芸術的な趣向をこらした地図——が作成された。近代初期のヨーロッパは、まさに驚異なるものと驚きにあふれた時代であった。

ケンセスは、16世紀と17世紀の驚異 (marvels) のカテゴリーを、三つに大別している。

- 1) 超自然のもの。例えば、キリストの行った奇跡、聖人たちの見た幻想や神秘的恍惚、神秘的な治療などは、神の御業と解された。
- 2) 自然のもの。例えば、フリークとモンスター。これらもやはり神の御業と解された。特筆すべきは、新世界の原住民が、近代初期ヨーロッパの人々の好奇心を激しくかきたてたことである。顕微鏡で植物や昆虫の観察をした人々やそれらの図版を見た人々は、生物の精妙な組織に対して、驚きと賞賛の念に駆られた。シェイクスピアの生きた時代よりは遅れるが、最も有名な例のひとつとして、生物学者であり顕微鏡の実質的な発明者とされるロバート・フック (Robert Hooke, 1635-1703) の図譜『マイクログラフィア』(1665)を挙げておく。
- 3) 人工的なもの。ミケランジェロ、レオナルド・ダヴィンチの作品を筆頭として、人間の創意工夫の才が、人々の驚きの対象となった。演劇に関連しては、回り舞台やスペクタクルもこのカテゴリーに含められる。⁸

ケンセスは、驚異なるものの「定義」を列挙している。ケンセス自身が認めているように、定義というよりは驚異なるものと評価された「判断基準 (criteria)」を列挙し、驚異なるものとして評価された性質や特徴を説明したものである。驚異なるものの判断基準を網羅することはほぼ不可能なので、以下のリストは完全なものではない。しかし、近代初期の世界または宇宙には、驚くべきものがほとんど無尽蔵にあったはずにもかかわらず、当時の人々は、それらすべてを驚異なるものと見なしたわけではなかった。文芸批評と哲学の伝統、さらに新しい思潮をさまざまな形式で反映しながら、驚異なるものと評価する「判断基準」があったのだ。そのことを理解するために、このリストは有

⁸ Kenseth 31-39.

益である。

それぞれの判断基準に対して、ケンセスは、ルネサンスとバロック時代の多数の芸術家と文学者の作品例を取り上げているが、以下では項目だけ列挙する。

- ・目新しさ(novelty)と稀有さ(rarity)。
- ・外来のものか異国的なもの(the foreign or exotic)、不思議なものや奇妙なもの(the strange and bizarre)。
- ・多様性(variety)。
- ・巨大なもの(the unusually large)と極小なもの (the unusually small)。
- ・至高の技術や卓越した技量・知識 (virtuosity) を示すもの。難しい問題を克服することや一見不可能なことを成し遂げること。
- ・生き生きとしているもの(vividness)と本物らしさ(verisimilitude)。
- ・超越なるもの(the transcendent)と崇高なるもの(the sublime)。
- ・驚くべきもので、しかも意外なもの(the surprising and unexpected)。⁹

驚異なるものは、「多様性」をひとつの判断基準とする。しかし、このリストをただで、驚異なるもの自体が、非常に多様な判断基準を持っているだけでなく、時には矛盾を内包していることがわかる。驚異なるものと判定されるには、ひとつの判断基準を満たせばよいとすれば、ある判断基準と別の判断基準との間に生じうる矛盾または両立の困難は指摘するに及ばない。だが、ひとつの判断基準の中ですら、矛盾または概念規定が著しく困難なものを見出すことができる。特に、文芸批評の見地からは、「生き生きとしているもの(vividness)と本物らしさ(verisimilitude)」は、リアリズムとは何かという古代から継続している論争に関わる。

近代初期の芸術家は、古典の模倣(ミメシス)の理念を復興・追求し、本物の人間のように見えるように、描写したり彫刻しようとした。これらの作品を見た人々が、驚いたり賞賛したりしたことは容易に察することができる。こうした作品だけでなく、この時代の画家たちは、イングランドで創作したドイツの画家ハンス・ホルバイン(Hans Holbein, 1497-1543)(子)の『大使たち』(1533)のようなだまし絵(trompe-l'oeil)を描き、歪像(アナモルフォーシス)の技法を開発することとした。こうした絵は、確かに、見る者に驚きの念を起こさせる。＜リアリティ＞——場合によっては＜真実＞——を見せる、または認識させるという前提のもとに、見る人の視覚を「だます」という倒錯的技法

⁹ Kenseth 40-53.

が開発されたのである。だまし絵を見る人が、驚き、当惑、喜びなどの反応を起こすと同時に、知覚の不確実性、ひいては世界という構造物の不確実性まで認識させられると考えてもよい。しかし、ここでの問題点は、驚異なるものの判断基準のひとつ、「本物らしさ」である。だまし絵は、いつも「本物らしく」描かれているわけではない。むしろ、歪曲されたり、通常の見方では対象を見ることができないように描かれているのだ。とすれば、この「本物らしさ」とは何なのか？ このように検討すれば疑問がつかない。こうした疑問を起こさせることを含めて非常に興味深い判断基準のリストを見るだけでも、近代初期ヨーロッパの人々が驚異なるものに魅せられた状況は理解できる。

とはいえ、約2世紀にわたった驚異なるものの時代もやがて衰退の時期を迎える。国、地域、民族等による比較検討を含めて、驚異なるものの諸対象のより具体的な議論は、それぞれの専門家の論文に委ねて、ケンセスは、『驚異なるものの時代』の序論を次のように締めくくっている。「1700年までに、驚異なるものへの嗜好が、大半の西ヨーロッパで減少していた。」¹⁰ 18世紀になっても驚異なるものへの嗜好は残るが、主要な文化的力ではなくなるのだ。これにはいくつかの理由が考えられるが、一番の理由は、より近代的な哲学と科学の発展によって生じた懐疑主義であろう。多数の奇跡的または魔術的な治療、幻想（ヴィジョン）、復活への信仰などが疑問に付された。¹¹ 科学者たちは、自然現象を数学の言葉で説明するようになった。以前はモンスターのような異形(anomaly)は神の意志や創意工夫として説明されたが、今度は医学的病理学の主題となった。驚きの部屋が普及しすぎたために、自然なものも人工的なものも、驚きを起こす力を失ったとも考えられる。

とはいえ、ケンセス自身が序論の結論で指摘しているように、またこの点は驚異研究者たちの見解は一致していると言えるが、ルネサンス・バロック期の驚異なるものの流行は衰退したとしても、現代文化を見渡せば、驚異なるものの時代は依然として続いている。私たちは、相変わらず、驚異なるものに魅せられているし、驚異なるもの、驚きを求めているのである。¹²

¹⁰ Kenseth 53.

¹¹ この辺の事情は、キース・トマスが『宗教と魔術の衰退』で、魔術の衰退の原因を述べている部分と重なるので参照されたい。Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic: Studies in Popular Beliefs in Sixteenth- and Seventeenth-Century England* (1971; Penguin Books, 1985). 荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』上下二巻（東京：法政大学出版局，1993）下巻第22章「魔術の衰退」。

¹² ケンセスが列挙しているのは、超高層ビル、マイクロチップ、人間の偉業（月面着陸、スー

2. 驚異なるものと驚きについて

驚異なるものと驚きの研究は盛んに行われている。しかし、前節で"marvel"と"wonder"の辞書による定義を見たが、驚異なるものと驚きの概念には、実は決定的な定義も包括的な理論もないだけでなく、一人の研究者による体系的著作集も存在しない。驚異なるものの包括的な理論を構築することが難しい理由は明白であろう。驚異なるものが関わる領域の広範さと対象の豊富さ——自然のもの、人工のもの、超自然のもの（または超自然のものと考えられているもの）——と、多領域の現在も進行中の拡大発展、新しい領域の出現、対象の増殖を考慮すれば、これらを網羅して、統一的に説明できる一般性を持つ体系的理論を構想することはほぼ不可能であり、驚異なるものの包括的な理論は今後もおそらく構築することができないと考えざるをえない。

ここでは、本論で扱う近代初期イングランドの文化とシェイクスピアのテクストにおける驚異研究に関連して、現時点で最も優れた成果をあげているピーター・G. プラット (Peter G. Platt) の二冊の書物を取り上げる。『理性の縮小：シェイクスピアと驚異なるもの (*Reason Diminished: Shakespeare and the Marvelous*)』(1997)と『近代初期文化における驚き、驚異、怪物たち (*Wonders, Marvels, and Monsters in Early Modern Culture*)』(1999)である。一冊目は、オックスフォード大学で受理された博士論文に基づくプラットの著書であり、二冊目は、彼が編集した論文集である。単独の著書の序文で、彼は次のように弁明している。

万一、私の目標が驚きの全体化であるとしても、驚きというものの性質自体が全体化を拒む。なぜなら、驚きとは、際限もなく疑問を発して、安定化や確実性を無効にすることがありうる形象 (figure) であり概念なのである。¹³

バスター、神童ヴァイオリニスト)、ヴォヤジャーによる発見、特撮、花火、パレード、発明等。Kenseth 55. なお、『驚異なるものの時代』で、モンスターとフリーク、異常出産が言及されていたが、驚異なるものにはく怪物なるもの (the monstrous) も含まれる。20世紀末、スコットランドでクローン羊のドリーが生産された。2001年夏、イタリアの産科医を中心とするグループが、クローン人間を出産 (再生産) させる計画を発表して大騒ぎになったが、賛成派はそこに人類の希望を見出し、反対派はそのような「モンスター」を作ってはならないと主張する。この論争は示唆に富む。驚異なるものは、人類にとって夢でも悪夢でもあり続けているのである。

¹³ Peter G. Platt, *Reason Diminished: Shakespeare and the Marvelous* xvi. 書名は、シェイクスピア作『お気に召すまま』に登場するハイメン (ギリシア神話の婚姻の神) の台詞 (5幕3場 138-39

プラット編『近代初期文化における驚き、驚異、怪物たち』は、驚異——驚き、驚異なるもの、怪物なるもの——の多種多様な言説的实践を明らかにした論文集である。扱われる材料や領域は多岐にわたる——美術理論、博物誌、旅行文学、宗教論争、口論詩 (flyting)、原始医学の物語 (proto-medical narratives)、驚きの本 (wonder books)、政治理論、個人的なエッセイ、戯曲、神学、悲嘆詩 (jeremiad verse)、哲学、形而上詩など。論集は、驚異なるものが多様な使われ方で呼び起こされたことも明らかにする。プラットは、序文で、驚きが近代初期には「絶対的に中心概念」であったと述べている。彼に言わせれば、近年の研究によって、驚異なるものに関して、アリストテレス主義の伝統に基づく合理的な説明が疑問に付され、認識論的な確実性と美学的全体性に異議を唱えるような力があったことが認められるようになった。その結果、「驚異なるものを明確にすることが以前より容易になったわけではないが、最近明白になったのは、驚き是一元論的 (monological) な概念ではなかったということである。」

その上で、プラットは、『驚異の縮小』で再評価した 16 世紀のイタリアの哲学者フランチェスコ・パトリッツィ (Francesco Patrizi) の驚異 (*la maraviglia*) の 12 の源泉を列挙している——無知、寓話 (fable)、目新しさ (novelty)、パラドックス、増大、逸脱、「異常に自然なもの」、神聖なもの、重宝なもの、精巧なもの、意外なもの、突然なもの。パトリッツィのリストは、合理的なものから非合理的なものまで広範囲にわたる。プラットに言わせれば、このリストは、近代初期に驚異なるものとは何であったのか、またどのような効果を持っていたのか、と私たちが定義したくても、その時代に存在した他の源泉から分離して、ひとつだけの定義をすることは難しいことを示している。プラットは、驚異なるもののパラドクシカルな意義を述べて、序文を締めくくっている。

驚異なるものと怪物なるものは、ほとんど常に、支配 (mastery) と分類をかわす危険がある。だが、この御しにくさこそが、芸術的可能性、身体、可知の世界、人間の潜在能力、これらの地図の書き直しを促進することができるだ。¹⁴

行) にちなむ。

¹⁴ Peter G. Platt, ed. *Wonders, Marvels, and Monsters in Early Modern Culture* (Newark: U of Delaware P, 1999) 22. この序論では、イタリア語の "*la maraviglia*" という語が驚異 (marvel) とも驚き (wonder) とも英訳されているし、驚異なるもの (the marvelous) の他に "*the wonderful*" という語が断りもなく使われている。驚異なるものの多様性と複雑性を考えれば止むをえないとして

驚異研究を多少知っている者なら、驚異なるものが、仮に——あえて単純な見方をして——中世キリスト教ヨーロッパでは比較的に一元論的でありえたとしても、近代初期に一元論的な概念であったと考えるはずがない。ともあれ、ブラット編の驚異論集が示すように、研究が発展するにつれて、驚異なるものの定義や理論が明確になったわけではない。明らかになったのは、驚異なるものの途方もない複雑性である。この複雑性に直面して、少しでも全体的に理解しようという試みが継続しているのである。(ちなみに、これはジェンダー研究の置かれている状況に酷似している。)

本論では、近代初期文化研究における驚異なるものと驚きの理論として、スティーヴン・グリーンブラットの『驚異と占有：新世界の驚き』を参照枠とする。(なお、この本の序はブラット編『近代初期文化における驚き、驚異、怪物たち』[1999]にも収録されている。)グリーンブラットの理論の検討は別稿で行ったので、ここでは彼を含めた驚異研究者たちが前提または既知事項としている、近代初期ヨーロッパにおける驚異なるもののと驚きの古典的伝統と近代初期思想等を概観する。¹⁵

も、語の不用意な使い方は、読者を混乱させる。

¹⁵ 近代初期ヨーロッパの驚異に関する文芸理論を概観するときの基本文献は、以下の通りである。Baxter Hathaway, *Marvels and Commonplaces: Renaissance Literary Criticism*; Baxter Hathaway, *The Age of Criticism: The Late Renaissance in Italy* (Ithaca: Cornell UP, 1962); Bernard Weinburg, *A History of Literary Criticism in the Italian Renaissance* (Chicago: U of Chicago P, 1961) 2 vols. 以下の論文も参照。James V. Mirollo, "The Aesthetics of the Marvelous: The Wondrous Work of Art in a Wondrous World," in *The Age of the Marvelous*, ed. Kenneth 61-79 (この論文は、Platt, ed., *Wonders, Marvels, and Monsters in Early Modern Culture* 24-44にも収録されている。)驚異なるものと驚きの理論の最近の発展は著しい。近代初期イングランドの詩(特にジョン・ダンを筆頭とする形而上派詩人のテキスト)におけるレトリックの技法の見直しとして、以下を参照。James Biester, *Lyrical Wonder: Rhetoric and Wit in Renaissance English Poetry* (Ithaca: Cornell UP, 1997) esp.23-66.

シェイクスピアのテキストに関連する驚異理論の概観は以下を参照。Tom B. Bishop, *Shakespeare and the Theatre of Wonder* (Cambridge: Cambridge UP, 1996) ch. 1 Theory of Wonder: Theatre of Wonder 17-41; Platt, *Reason Diminished: Shakespeare and the Marvelous*, ch. 1 Theories of Wonder from Aristotle to the Renaissance 1-18.

本論では、プラトンの哲学および新プラトン主義に関連する驚異なるものと驚きの思想の概観には立ち入らなかった。近代初期イングランド文芸における驚異研究には、フランセス・イエイツ (Frances A. Yates) が魔術や錬金術の思想に存在する新プラトン主義の流れを解明し、大きい足跡を残した。彼女は、シェイクスピアのロマンス劇がジョン・ディーの錬金術的思想とつながる可能性をも探求した。Frances A. Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition* (Chicago: U of Chicago P, 1964); *Theatre of the World* (1969; repr. London: Routledge & Kegan Paul, 1978); *Astrea: The Imperial Theme in the Sixteenth Century* (London: Routledge & Kegan Paul, 1975); *The Occult Philosophy in the Elizabethan Age* (1979; repr. London: Routledge & Kegan Paul, 1985). 特に、錬金術師・地理学者・数学者のジョン・ディー(John Dee, 1527-1608)は重要である。彼は、ヨー

ここでは本論に関連する「驚き」について、人文科学と自然科学の二つの系譜から、代表的な考えを見ておく。人文科学（特に文芸理論）では、アリストテレスの『形而上学』『弁論術』『詩学』が、最も重要なテキストである。『形而上学』で、アリストテレスは、人間の知（知識と知恵）への欲望の根源にあるものとして、驚きの念を指摘した。「驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にそうであるように、知恵を愛求〔哲学〕し始めたのである。」¹⁶『弁論術』の第1巻第11章で、アリストテレスは「快樂」とは「魂の一種の運動、つまりその平常の本性の回復」であると定義してから、快いものを列挙している。彼は、そこでも驚きの念（「不思議がる（θαυμάζειν）こと〔thaumazein は不定詞形〕）について論じている。

また学ぶことや不思議がることはたいいていの場合快いことである。何故なら不思議がることのうちには学ぼうとする欲望がある、従って不思議がられるものは欲望されるものであるし、そして学ぶことのうちには本性に一致した状態の回復があるからである。（中略）学ぶことも不思議がることも快いことであるから、またこのような性質のものどもも快いものでなければならない、例えば絵画や彫刻や詩のような模倣物や巧く模倣している一切のものがそのような性質のものだが、これらはたとえ模倣される当のものは快いものでなくとも、そうなのである。というのはその当のものを喜ぶのではなくて、むしろそこには「これはあれだ」という推論があり、

「ロッパで学び、広く旅行してから、多数の天文機器をイングランドに持ち帰った。魔術師ではないかと噂されつつ、エリザベス一世付きの占星術師となった。新世界や極東への航路の探検に助言を与え、エウクレイデス（ユークリッド学派の創始者）の著作の最初の英訳に尽した。イエイツは、『シェイクスピアの晩年劇』で、プロスペローにジョン・ディーの投影を見るだけでなく、今後の研究としてシェイクスピアとペイコンのつながりも探求するに値すると遺言した。*Shakespeare's Last Plays: A New Approach* (London: Routledge & Kegan Paul, 1975) 131-32.（現時点では学問的成果を十分あげているとは言えないが、重大かつ刺激的な遺言である。）しかし、私自身は、ユダヤ・キリスト教カバラ、薔薇十字運動、当時の支配思想とされたオカルト思想を、ヘブライ語およびその他の言語で書かれた原典を解説しながら、本格的に研究する時間も能力もないと言わざるをえない。

¹⁶ アリストテレス、『形而上学』，出陣訳『アリストテレス全集 12』（東京：岩波書店，1968）第1巻第2章 10。引用文中の「あの最初の場合」とは、第1章の以下の部分を指している。「最初に、常人共通の感覚を超えて、或るなんらかの技術を発明した者が、世の人々から驚嘆されたのも当然である。それも、ただたんにその発明したもののうちになにか実生活に有用なものがあるからというだけでなく、むしろそれを発明したほどの者は知恵のある者であり、他の人々とはちがって遥かに優れた者であるからという理由で、驚嘆されたのである。」(6)

従って何かを学ぶということが起こるからである。また〔悲劇における〕運命の急転や、すんでのところで危険から脱れることも快いことである。何故ならそれはすべて不思議なことだから。¹⁷

文学研究者には最もよく知られているアリストテレスのテキストと言える『詩学』でも、彼は驚き（驚異 τὸ θαυμαστόν、驚くべきこと θαυμαστόν）[to thaumaston は中性形定冠詞に形容詞を続け中性名詞化したもの、thaumaston は形容詞の中性形]について論じている。アリストテレスは、悲劇を構成する物語の中で驚きの要素を重視する。

悲劇に於ける再現の対象は、単に完結した行為ばかりではなく、恐怖と同情とを誘う出来事でもなければならぬが、こういう事柄が最も効果的に生ずるのは、出来事が相互に関係しながらも思いがけぬ仕方では生起する場合である。確かに、そういう風にして事が起これば、自動的につまりひとりでに生じたり、偶然にそうなりするという場合よりも、一層人を驚かすであろう。事実、単なる偶然の出来事ですら、そこに何ものかの意志が働いているかのように見えた場合、驚きは最も強烈である。例えば、ミテュスを死に追いやった男が、年経てアルゴスの都の祭を見物していたら、その町のほからならぬミテュスの彫像が倒れ落ちて、その男を殺してしまった、というような場合がそれである。確かに、このような出来事はしかるべき謂れもなしに起きたとは思えないであろう。こういう次第で、この種の筋の方がどうしても比較的すぐれた物語であるということになる。¹⁸（傍点筆者。）

アリストテレスは、悲劇の構成要素である「アナグノーリシス (anagnorisis)」——認知または発見的再認——に諸形態があることを論じてから、最も優れたアナグノーリシスについて説明している。

¹⁷ アリストテレス、『弁論術』、山本光雄訳『アリストテレス全集 16』（東京：岩波書店、1968）66-72.

¹⁸ アリストテレス、『詩学』、今道友信訳『アリストテレス全集 17』（東京：岩波書店、1972）41。訳者注によれば、ミテュスとは、前 374 年にアルゴスにいた人であり、プルタルコス、ヘロドトス等の著作でも似たような話がある（151）。

あらゆる発見的再認の中でも、一聯の出来事そのものから結果し、いかにもありうべき成り行きから生じる驚愕を伴う発見的再認が、何と言っても、最も秀れている。ソポクレースの『オイディプス王』にみられるものや、エウリーピデースの『イーピゲネイア』に於いて、その例を見ることができる。¹⁹（傍点筆者。）

『詩学』でアリストテレスは、叙事詩についても論じている。彼は、悲劇でも叙事詩でも「驚き」を創造することが必要だが、叙事詩の方が、驚きの効果を生み出すのにあずかって最も力ある「非合理的なもの」を受け入れやすいと指摘する。とはいえ、「驚くべきこと、驚異とは、またそのまま快すなわち、喜びの効果でもある」²⁰、と述べている（傍点筆者）。

アリストテレスによる驚きの理論の特色は、二つに要約できる。第一に、驚きに教育的、心理的、知的にも大きい意義を認めたことである。とはいえ、彼の作り出した概念には悲劇における「カタルシス」を代表として、後世の学者に多様な解釈をされることになる曖昧性があり、ここでも「驚き」とは何であるのか明確に規定されているわけではない。さらに、以下の見解に異論がないわけではないが、アリストテレスが論じた「驚き」は、最終的には合理的に説明がなされ解消されるべきものだと考えられる。彼の理論の二番目の要点は、特に悲劇と叙事詩において驚きが喜びをもたらす効果を持っていると指摘したことである。しかし、ここでも、なぜ驚きが喜びをもたらすのかという原因は解明されていない。

古代ギリシア・ローマ文明の後、キリスト教化された中世ヨーロッパでも、驚異なるものの伝統には多少の連続性があった。なぜなら、驚きは、キリスト教の驚異なるものの伝統にとって中心的位置を占める奇跡がもたらす効果であったからである。12世紀と13世紀にアリストテレスの著作が発見されてから、ドイツ中世の哲学者アルベルトゥス・マグナス(Albertus Magnus 1200頃-80. 主著は『神学大全』と『被造物大全』)、とイタリアの神学者トマス・アクィナス(Thomas Aquinas, 1225-74. 主著『対異教大全』と『神学大全』、後者は未完)等も、学問における驚きと、詩の効果としての驚きについて、アリストテ

¹⁹ アリストテレス、『詩学』60-61。

²⁰ アリストテレス、『詩学』94。

レスの議論を踏襲したと言われる。²¹ アリストテレスの理論は後世の人々に大きい影響を及ぼし、彼の理論の枠組の中で諸理論が派生した。古典後期と中世後期の驚きへの接近法は、驚きを喚起し、それを解消するという標準的なアリストテレス様式を踏襲する傾向があったとされる。

キケロ(Marcus Tullius Cicero、前106-前43)、クインティリアヌス(Marcus Fabius Quintilianus、35頃-100頃)等、ローマの弁論術(修辞学)でも知性と合理が強調された。ローマの伝統に対して、新プラトン派の弁論術(修辞)学者ロンギノス(Dionysios Longinos、213頃-273、『崇高論』の著者)、アテネの雄弁家・哲学者デメトリウス(Demetrius Phaleron、前350頃-前280頃、『文体論(On Style)』の著者)、批評家・弁論家ディオニシウス(Dionysios Halikarnasseus、前1世紀)、ヘルモゲネス(Hermogenes、紀元2世紀後半)等のギリシアの弁論術(修辞学)は感情の働きをもっと認めたと言われる。²² アリストテレスの理論とそれから派生した諸説、およびその他の驚きの理論が、近代初期ヨーロッパの文芸に大きい影響を及ぼした。

ここで驚異なるものの文学と批評を取り上げると、イングランドの文学で最も著名なのは、ジョン・ダン(John Donne、1572?-1631)を代表とする一群の詩人が書いた形而上詩(Metaphysical poetry)であろう。これらの詩人たちは、奇想(コンシート)、機知、複雑かつ柔軟な言語能力を駆使し、一見何の関連もないもの同士を結びつけ、不和の調和(discordia concors)を見出そうとした。例えば、愛する女性をコンパスの芯、愛する男性を芯に依存しながら自由に動き回るコンパスの脚に譬えた驚くべき奇想が有名である("A Valediction: Forbidding Mourning")。だが、皮肉にも、形而上詩は、やがてアリストテレスの伝統から派生したジョン・ドライデンを代表とする新古典主義派の批評家たちから、奇矯、不明瞭(obscure)、均整がとれていないと批判された。

驚きの二番目の系譜は、自然科学系のものである。ローマの博物学者プリニウス(大)(Plinius Major、全名 Gaius Plinius Secundus、23-79)の著した37巻の百科事典『博物誌(Naturalia Historia)』(77)は、フィリーモン・ホランド(Philemon Holland)により英訳(1601)されていた。また神学者アルベルト

²¹ J. V. Cunningham, "Woe or Wonder": *The Emotional Effect of Shakespearean Tragedy* (Chicago: Swallow P, 1969) 70-74 参照。

²² Philip P. Wiener, ed., *Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas* (New York: Charles Scribner's Sons, 1973) vol.IV, 168-70 参照。

ウス・マグナスは、博物学者でもあり、キリスト教の伝統の中で自然の研究を正統な学問（サイエンス）として確立したと言われる。プリニウスとアルベルトゥス・マグナスに代表される博物誌の系譜や、古代から近代初期までの探検の記録等には、無数の驚きの言説がある。ここでは本論に密接に関連するものに焦点を合わせ、モンテーニュ、 베이コン、デカルトだけを見ておく。三人の共通点のひとつは、錬金術が化学に、占星術が天文学に変わる時代——逆に言えば、それらがまだ混在していた驚異なるものの時代——に生きたことである。

フランスの随想家ミシェル・エーケム・ド・モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne, 1533-92) は、『エッセー』(Les Essais, 1580年に第1巻と第2巻、1588年に第3巻、死後1595年に加筆版出版)を著した。『エッセー』のジョン・フローリオ(John Florio)による英訳(1603)を読んで、シェイクスピアがテクストに取り入れたことは広く知られている。例えば、第1巻第31章「食人種について」は『テンペスト』でゴンザーロが語るユートピア論(2幕1場)に影響を及ぼしている。モンテーニュは、哲学と古典文学などの人文学にも、プリニウスの『博物誌』を始めとする自然科学系の知にも造詣が深い。ここでは彼の驚きについての思想を見ておく。驚異研究の分野で最も重視されるのは、第3巻の第11章「びっこについて(Of the Lame or Crippel[sic])」である。その中で、彼は次のように述べている。

It is a wonder, to see how from many vaine beginnings and frivolous causes, so famous impressions doe ordinarily arise and ensure All these miracles and strange events, are untill this day hidden from me; I have seen no such monster, or more expresse wonder in this world, then myself. *With time and custome a man doth acquaint and enure himself to all strangenesse*; But the more I frequent and know my self the more my deformitie astonieth[sic] me; and the lesse I understand my self. (通常、いかに空虚な発端とつまらない原因からあれほど有名な印象が生じるかということは実に不思議である。

(中略) これまでのところ、あらゆる奇蹟や奇怪な出来事は私の前から姿を消している。私は私自身よりも明らかな化物や奇蹟を見たことがない。人は習慣と時間のおかげでどんな奇怪にも慣れるものだ。しかし、私は自分に親しみ自分を知ることが多ければ多いほど、それだけ自分の畸形に驚

き、ますます自分がわからなくなる。) ²³

しかし、モンテーニュは近隣の村で起こった「失敗したばかりの奇蹟」を例に挙げながら、奇蹟や同類のものに大騒ぎをする人々を非難しない。この例では、その場限りの冗談のつもりで、ふざけて精霊の声をまねた三人組が、あらゆる階級の人々が駆けつけ何カ月もだまされるので、悪ふざけを大掛かりにし、ついに捕らえられた。それでも、「これに類する多くの事柄でわれわれの認識を越えるものに対しては、拒けるのにも受け入れるのにも判断を保留するのがよいと思う」、とモンテーニュは述べる。これに続けて、彼は有名な無知の弁護論を展開する。

Many abuses are engendered into the World; or to speake more boldly, all the abuses of the World are engendered upon this, that wee are taught to feare to make profession of our ignorance, and are bound to accept and allow, all that wee cannot refute ... I love these words or phrases, which mollifie and moderate the temerity of our propositions: *It may be: Peradventure: In*

²³ Michel de Montaigne, *Montaigne's Essays*, trans. John Florio, 3 vols. (London: J. M. Dent & Sons, 1965) 3rd vol. XI: Of the Lame or Crippel 281-82. 邦訳は、『エッセー』, 原二郎訳 (東京: 岩波書店, 1967) 全6冊、第6冊 54-55 による。第三卷第十一章の標題になっている「びっこについて」とは、イタリアのことわざ、「びっこの女と寝たことのない者はウェヌスの完全な魅力を知らない者だ」に対する、古代哲学 (アリストテレスの『プロブレマタ』) による解釈、「びっこの女の脚や腿はその不完全さのために、当然受けるべき栄養を受けないから、その上にある性器がいつそう充実し、栄養がよく、旺盛になる」をふまえている。「現に私も、かつては、昔から一般に信じられているこのことわざのために、足のまっすぐでない女から普通の女よりも快楽を得たと信じたし、そのことを女の魅力の中に数えたこともある」と、モンテーニュは告白している (邦訳 62-63)。好奇心旺盛なモンテーニュの面目躍如たるエピソードを通して、人間の理性の不確実性が強調されている。(補注: 「びっこ」は現在では差別語なので使用すべきではないが、邦訳のままにしておいた。)

モンテーニュは、『エッセー』の随所で、性的欲望、性交渉、恋愛、結婚に関して率直に語っている。とはいえ、『ブリタニカ百科事典』によれば、モンテーニュは「女性嫌いとしばしば呼ばれている」。これは、彼が、若い頃に親友エティエンヌ・ド・ラ・ボエティエ (Étienne de la Boétie, 1530-63) の夭逝によって長年の憂鬱に陥ったこと、結婚しても子供をもうけていないことにも関連していると思われる。モンテーニュが、「実は、不安を感じたり、自分自身のアイデンティティを見出して肯定したいと試みる点では、男女は根本的に同じであること、ただ習慣と古めかしい現状に執着するために男女の外見上の違いが確立されてしまうにすぎないと認めている」ことは評価できる。ただ、「モンテーニュは、この根本的な分離を克服し、知的な平等性を確立する可能性を探索してはいない」のだ。Montaigne, online, Britannica com, 13 Oct. 2001. ジェンダーに関する認識の限界は、モンテーニュに限らず、シェイクスピアを含めたこの時代の多数の人々に共有されているものである。ここでもジェンダー研究の歴史的課題が提示されているのは重要である。

some sort: Some: It is said: I thinke, and such like: And had I beene to instruct children, I would so often have put this matter of answering in their mouth; enquiring, and not resolving: *What meanes it? I understand it not: It may well bee: Is it true?* that they should rather have kept the forme of learners, untill three score yeeres of age, than present themselves Doctors at ten, as many doe. *Whosoever will be cured of ignorance, must confesse the same. Iris is the daughter of Thaumantis, Admiration is the ground of all Philosophy: Inquisition the progresse: Ignorance the end.* Yea but there is some kinde of ignorance strong and generous, that for honor and courage is nothing beholding to knowledge: An ignorance, which to conceive rightly, there is required no less learning, than to conceive true learning. (世の中の多くの誤謬は、いや、もっと大胆に言えば、世の中のすべての誤謬は、われわれが自分の無知を公表するのを恐れるように教えられていることから、反駁できないものはすべて受け入れなければならないとされていることから、生じる。(中略)私は、われわれの性急な陳述をやわらげ中和するような言葉、すなわち、「おそらく」とか、「ある意味では」とか、「幾分」とか、「…だそうだ」とか、「と思う」とかというような言葉が好きだ。だから、もしも子供を教育したのだったら、次のような、質問をするような、断定的でない答え方をしこたま口に叩き込んだであろう。「それはどういう意味でしょうか。私にはわかりません。あるいはそうかも知れません。それは本当でしょうか」と。そうすれば、いまの子供たちのように十歳で博士の真似をする代りに、六十歳になっても生徒のような態度を守り続けたであろう。無知を治そうと思うなら、無知を告白しなければならない。イリスはタウマンティスの娘である。驚異はあらゆる哲学の土台であり、研究はその過程であり、無知はその究極である。たしかに、名誉においても勇氣においても知識に少しもひけを取らないある種の強くて気高い無知がある。この無知をいただくには知識をいただくにも劣らぬほどの知識が要る。)(傍点筆者。なお、邦訳の訳注[65]で指摘されているように、「タウマンティスとあるのはモンテーニュの誤り」で、正しくはタウマス(Θαυμας、Thaumas)である。虹の女神イリスの父神で、ギリシア語で不思議、驚異を意味する。)²⁴

²⁴ Montaigne 3rd vol. XI. Of the Lame or Crippel 283. モンテーニュ、『エッセー』, 原二郎訳, 第6

モンテーニュは、生涯思索を続け、死ぬまで『エッセー』を書き続けた。引用した第3巻第11章「びっこについて」は、彼の晩年の境地をよく表している。モンテーニュは、中年期には理性と信仰の間で苦悩し、精神的危機に陥り、人間の理性は存在や本質の絶対的真実を把握できない無力なものではないかという懐疑主義に傾倒したことがあった。とはいえ、彼の生涯の根底には、ストイックなモラリストとしての信念が一貫しており、晩年になるとソクラテスを人間性の理想と見なし、懐疑主義を乗り越え、エピクロスの快樂主義へと向かう傾向さえも見られる。「びっこについて」では、理性の限界をめぐる彼の思索は、穏やかな精神状態で述べられている。肝心なのは、理性の限界と知の不確実性に対峙しながら、モンテーニュが、人間の知的な営みの重要性を揺るぎない信念を持って説き、「驚き」が知的な営みの土台だと改めて評価したことである。近代初期の科学的合理主義が台頭する兆しのある時代の中で、彼は葬り去られかねない奇蹟、驚異、驚きの価値を認め直したのである。

次に、哲学者・政治家フランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561-1626) の『学問の進歩』(1605、ジェームズ一世に献呈された著書)を取り上げる。第1巻「学問のこうむった不信と汚名」の中で、ベーコンは「すべての知識と(知識の種子である)驚き」の適用の仕方を論じ、神に関して「驚き(wonder)」は「不完全な知識(broken knowledge)」である、と人間の知の限界を指摘する。²⁵ 他方で、イングランドの経験主義的思想の始祖と言われるベーコンは、驚きの意義を認めてもいるし、驚異なるものの研究も擁護しているので、注目に値する。

ベーコンは、自然の歴史には三種類あると言う。「正常な自然の歴史と、異常あるいは型はずれな自然の歴史と、人工によって変えられた自然の歴史」である。二番目の異常な型はずれな自然の歴史、つまり「驚異の歴史(history of marvels)」を探究する仕事がある二つの重要な効用について、彼は次のように論じている。

...the one to correct the partiality of axioms and opinions, which are commonly framed only upon common and familiar examples; the other

冊 56-57。

²⁵ Francis Bacon, *The Advancement of Learning*, in *Francis Bacon: A Critical Edition of the Major Works*, ed. Brian Vickers (Oxford: Oxford UP, 1996) 125. 『学問の進歩』, 服部英二郎, 多田英次訳(東京: 岩波書店, 1974) 22。ただし、邦訳の「驚異」は「驚き」と訳し直した。

because from the wonders of nature is the nearest intelligence and passage towards the wonders of art: for it is no more but by following, and as it were hounding Nature in her wanderings, to be able to lead her afterwards to the same place again. Neither am I of opinion, in this *History of Marvels*, that superstitious narrations of sorceries, witchcrafts, dreams, divinations, and the like, where there is an assurance and clear evidence of the fact, be altogether excluded. For it is not yet known in what cases and how far, effects attributed to superstition do participate of natural causes; and therefore howsoever the practice of such things is to be condemned, yet from the speculation and consideration of them light may be taken, not only for the discerning of the offences, but for the further disclosing of nature. (イタリック体は筆者による。) (その第一は、ありふれた熟知の例のみにもとづいてうちたてられるのがつねである、一般的命題や学説の偏見を是正するからであり、その第二は、自然の驚異から出発するのが人工の驚異を実演する術を見つける一番の近道であるからである。それというのも、さまよえる自然のあとをつけ、いわば、かぎつけることによってこそ、自然をのちにまたもとの場所に連れもどすことができるからである。なおまた、わたくしは、この驚異の歴史において、魔術や妖術や夢や占いなどに関する迷信的な話を、事実であることの保証やはっきりした証拠がある場合、まったく除外せねばならぬとは考えない。というのは、超自然力のせいになされている結果が、どのような場合に、どの程度まで自然的原因に関係があるのかがまだわかっていないからである。こういう次第で、魔術などを行うことはとがめられるべきではあろうが、しかしそれらのものを観察し考察することによって知識が得られて、まちがいを識別できるだけでなく、自然の秘密をなおいっそうあきらかにすることができるかもしれないのである。[傍点筆者。])²⁶

ベーコンもまた、モンテーニュのように、驚異なるものが知または学問の発達に貢献する可能性があると考え、驚異なるものと驚きの価値を認めたのである。

ルネ・デカルト (René Descartes, 1596-1650) は、思想史では、近代哲学と

²⁶ Bacon 177. 『学問の進歩』, 服部英二郎, 多田英次訳, 128-29.

近代自然観の始祖と位置づけられている。彼は、フランスのルネサンス期に生まれ、激動の時代——宗教改革運動、1610年の国王アンリ四世の暗殺、全ヨーロッパの規模で行われた1618年から48年までの三十年戦争——を生きた。自然科学系の驚異研究では、特に『情念論』（1649）は、ひとつの境界線になるとされる。デカルトの著書を代表とする近代初期の後期に位置づけられる時期に書かれた科学的文献には、ピーター・ブラットによれば、「ワンダー・シフト（驚きの転換）」²⁷と呼ばれる新しいアプローチが見出される。驚異なるものへの関心が、驚異なるものそれ自体から、その作用の仕方と構築のされ方へと転換したのである。ブラットは、科学的領域で起こった「驚きの転換」は文学ではもっと早く起こっていたと示唆している。その可否は措いて、この転換は、現代のジェンダー研究に起こった転換——ジェンダーとは何かという関

²⁷ Platt, *Reason Diminished: Shakespeare and the Marvelous* 63. シェイクスピアとデカルト（および他の同時代の著名人を含む）に関する研究として、以下を参照。Will and Ariel Durant, *The Age of Reason Begins: A History of European Civilization in the Period of Shakespeare, Bacon, Montaigne, Rembrandt, Galileo, and Descartes: 1558-1648* (New York: Simon and Schuster, 1961) esp. 636-47. 時代としてはヨーロッパで理性と信仰についての大論争が起こった時期、エリザベス女王の即位の年1558年から三十年戦争が終結した1648年まで、人物としては劇作家・詩人シェイクスピアから哲学者デカルトまでを扱ったこの浩瀚な本を、著者たちは次のように締めくくっている。概説的すぎる傾向はあるが、厳密に学問的な手続きを行って、シェイクスピアとデカルトを並べて論じた書物はほとんどないので引用しておく。"Amid this clash of armies and creeds the International of Science was laboring to lessen superstition and fear. It was inventing or improving the microscope, the telescope, the thermometer, and the barometer. It was devising the logarithmic and decimal systems, reforming the calendar, and developing analytical geometry; it was already dreaming of reducing all reality to an algebraic equation. Tycho Brahe had made the patiently repeated observations that enabled Kepler to formulate those laws of planetary motion which were to illuminate Newton's vision of one universal law, Galileo was revealing new and vaster worlds through his ever larger telescopes, and was dramatizing the conflict of science and theology in the halls of the Inquisition. In philosophy Giordano Bruno was letting himself be burned to death in the attempt to reconceive deity and the cosmos in terms of worthy of Copernicus; Francis Bacon, summoning the wits to science, was mapping its tasks for centuries to come; and Descartes, with his universal doubt, was giving another cue to the Age of Reason. Morals and manners were molded by the vicissitudes of belief. Literature itself was touched by the conflict, and the ideas of philosophers echoed in the poetry of Marlowe, Shakespeare, and Donne. Soon all the wars and revolutions of the rival states would sink into minor significance compared with that mounting, spreading contest between faith and reason which was to agitate and transform the mind of Europe, perhaps of the world." (647). Jacques Lezra, *Unspeakable Subjects: The Genealogy of the Event in Early Modern Europe* (Stanford: Stanford UP, 1997)は、本論の参考にはならなかったが、デカルトの『第二省察』、セルバンテスの『ドン・キホーテ』、シェイクスピアの『尺には尺を』を中心テキストとして、フロイト、ラカンの精神分析を応用し、近代初期ヨーロッパの「主体」の系譜学に関する貴重な研究である。

心から、その構築のされ方へという関心の転換——を想起させるものである。